東方學報　京都第九四册（二〇一九）：六七-八七頁

魏晉『莊子』注釋史における郭象の位置

古　勝　隆　一

序

現在ほぼ完全な姿で傳えられている最古の『莊子』注釋は、西晉の郭象のものであるが、その郭注は魏晉時代の『莊子』注釋史においてどのように位置づけられるのであろうか。本稿では、郭注が、それ以前の注釋の影響をどの程度受けたものであり、どの程度の獨自性を持つのかを問題としたい。

郭象に先行する注釋者として崔譔・向秀・司馬彪がいる（いずれも西晉の人）。『經典釋文』序錄によれば、それぞれの注釋の目錄的事項は以下の通りである。[1]

・崔譔注、十卷、二十七篇〔淸河人、晉議郎。內篇七、外篇二十〕。

・向秀注、二十卷、二十六篇〔一作二十七篇、一作二十八篇。亦無雜篇、爲音三卷〕。

・司馬彪注、二十一卷、五十二篇〔字紹統、河內人、晉祕書監。內篇七、外篇二十八、雜篇十四、解說三。爲音三

卷〕。

・郭象注、三十三卷、三十三篇〔字子玄、河內人、晉太傅主簿。內篇七、外篇十五、雜篇十一。爲音三卷〕。

彼らの注釋を郭注と比較すれば、その時代における『莊子』の讀みの實態がよく分かるはずであるが、殘念ながらいずれの注も諸書に引かれた佚文として斷片的に遺るにすぎない。このような資料上の制約があるため、それらの佚文に賴って研究せざるを得ないが、そういった『莊子』注釋の佚文を最も多く載せているのは陸德明『經典釋文』であるので、[2]これを主たる手がかりとして、諸注を相互比較し、それによって影響關係の一部を考察する。

ただ、郭注には本文と直接に關わらない郭象自身の思想が强く出ており、これが彼獨自の玄學を表現するものであるから、他の注との單純に比較することは難しいが、詳しく檢討すれば、郭象が先行の注から繼承した側面、および郭象が獨自に解釋した側面の、二つの面が見えてくるように思われる。本稿では、上記諸家の『莊子』注釋について、その本文の他、(一)訓詁の注、(二)事物の注、(三)義理の注に分けて、郭象との比較のもとに考察する。[3]

郭注には『莊子』本文の大意を大膽にとらえた、玄學的な注釋が多いため、郭象の『莊子』讀解がどのような訓詁的理解を基礎としたものであったのかは、自明であるとは言えない。それゆえ、郭注がどのような訓詁を踏まえて『莊子』を讀み解いたのか、關連著作が少なく研究の餘地がある。俞樾・孫詒讓・王叔岷ら考證學者の成果を參考として、郭象の『莊子』讀解を訓詁の水準に還元することで、西晉頃の一般的な『莊子』の讀みと、郭象獨自の『莊子』の讀みとを辨別するための例を提供したい。

第一節　崔譔の『莊子』注

崔譔は正史に立傳されておらず、『經典釋文』序録に「清河人、晉議郎」とあり、『隋書』經籍志に「梁有『莊子』十卷、東晉議郎崔譔注、亡」とあるのが數少ない資料であるが、後者に「東晉議郎」とするのは明らかに誤りで、[4] 西晉の人である。

その『莊子』注釋に關して、『世說新語』文學篇の注に引く『向秀別傳』に「(向秀) 惟好『莊子』、聊應崔譔所注、以備遺忘云」とあり、崔譔注は、後述する向秀注の基礎となったものと考えられる。また、『經典釋文』序録によると、崔譔本は二十七篇 (內篇七、外篇二十) であり、一方の向秀本は二十六篇 (もしくは二十七篇・二十八篇) であったといい、崔本・向本とも內篇・外篇のみで、雜篇はなかった。[5] 劉向以來の本文をすべて具備したらしい司馬彪の五十二篇本 (內篇・外篇・雜篇) や、それとは異なるが、崔譔本や向秀本に比べて篇數がやや多い、郭象の三十三篇本 (內篇・外篇・雜篇) と比較するならば、崔譔本と向秀本とが近いものであることが、篇數の點のみからも分かる。また、『經典釋文』莊子音義には、「崔向永和中本」なる本が複數回にわたり引用されており、早くも東晉時代の永和年間 (三四五-三五四) には崔本・向本を合した本が存在したことが分かるが、ここからも兩者の近さを知ることができよう。なお、郭象本は向秀本を踏まえたものなので (後述)、崔譔本は郭象本の祖であるとも言える。[6]

以下、その注につき、訓詁・事物・義理の側面からそれぞれ檢討する。

（一）訓詁の注。荘子音義に引く崔譔注は四七七條に及ぶというが、[7]その大部分が訓詁の注である。

大宗師篇の「翛（音蕭）然而往、翛然而來而已矣」の「翛然」について、荘子音義は「向云、翛然、自然無心而自爾之謂。郭、崔云、往來不難之貌」とある。[8]この「翛然」の訓詁について、郭象は向秀に從わず、崔譔に從っていることが分かる。

養生主篇の「緣督以爲經」という句について、荘子音義は「李云、緣、順也。督、中也。經、常也。郭、崔同」というので、これはもともと崔譔説であると考えられる。郭注は「順中以爲常也」としており、確かに一致する。[9]

ただ、郭象が常に崔譔に從うわけではなく、訓詁を比較すれば、まったく異なる解釋も多い。[10]

（二）事物の注。例えば、大宗師篇に見える神である「禺强」について、「『大荒經』曰、北海之神、名曰禺强、靈龜爲之使。『歸藏』曰、昔穆王子筮卦於禺强」と、古籍を引用して事柄の注をつけている。[11]また、庚桑楚篇の「是三者雖異、公族也、昭景也、著戴也、甲氏也、著封也、非一也」の一文は、解釋が分かれているが（『荘子校詮』に諸説が見える）、崔譔は「昭、景二姓、楚之所顯戴、皆甲姓顯封、雖非一姓、同出公族、喩死生同也」と解釋しており（少なくとも、楚の貴族に甲氏がないことを知っており）、楚の史實について一定の理解があったものらしい。

（三）義理の注。德充符篇と大宗師篇（いずれも内篇）の篇題に、崔譔の注がついていたらしいことが注目される。しかもこれらの注は、訓詁の注や事物の中ではなく、篇名に卽して、道家のタームを用いてその篇の大意を簡潔に解説したもので、義理の注と見なしうる。[12]

すなわち、德充符篇篇題の崔譔注に「此遺形棄知、以德實之驗也」とあり（荘子音義引）、郭象の同篇篇題の注に、「德

充於內、物應於外、外內玄合、信若符命而遺其形骸也」とあるのと對照できる。[13] また、大宗師篇篇題の崔譔注に「遺形忘生、當大宗此法也」とあり（莊子音義引）、郭象の同篇篇題の注に「雖天地之大、萬物之富、其所宗而師者無心也」とあるのと對照できる。大宗師篇篇題の注の場合、崔譔は修養の立場から「大宗師」を解釋したものらしく、一方の郭象は萬物の根本と理解している。兩者の視座は異なり、直接的な影響關係は見いだせないが、篇名を義理によって解釋する郭象の方法が、崔譔に遡るものであることが確認できる。

また崔譔は、班固の『莊子』注解を見ていたらしいことが『經典釋文』から分かる。[14] この點においても、『莊子』注釋史上、崔譔注は特色ある注釋であったと言えよう。

第二節　向秀の『莊子』注

向秀は『晉書』卷四十九に本傳が立てられているが、生沒年は明確ではない。交遊關係から見て、およそ、二二〇年代に生まれて西晉以後も活躍した人物である。[15] その『莊子』注釋については、本傳に「莊周著內外數十篇、歷世才士雖有觀者、莫適論其旨統也、秀乃爲之隱解、發明奇趣、振起玄風、讀之者超然心悟、莫不自足一時也」と見えているが、[16]『世說新語』文學篇に見える次の記事はとりわけ有名なものである。[17]

初、注『莊子』者數十家、莫能究其旨要。向秀於舊注外爲解義、妙析奇致、大暢玄風。唯「秋水」、「至樂」二篇未竟而秀卒。秀子幼、義遂零落、然猶有別本。郭象者、爲人薄行、有俊才。見秀義不傳於世、遂竊以爲己注。乃自注

「秋水」、「至樂」二篇、又易「馬蹄」一篇、其餘衆篇、或定點文句而已。後秀義別本出、故今有向、郭二莊、其義一也。

もともと、『莊子』を注釋した人は數十家もあったが、その書の要點を究めることができずにいた。そこで向秀は、それまでの注釋を超えて解釋をなし、それはたくみに分析した見事なもので、大いに（『莊子』の）玄妙な氣風を發揮した。ただ、「秋水」「至樂」の二篇に注をつけ終えないうちに向秀は亡くなってしまった。向秀の息子は幼かったため、その解釋はそのまま埋もれてしまったのであるが、それでも別本があって傳えられた。郭象という人がおり、人物は輕薄でも才能があった。向秀の解釋が世に傳えられていないと見るや、そのままそれを盜み取って自分の注にしてしまった。そこで自分で「秋水」「至樂」の二篇に注をつけ、さらに「馬蹄」篇の注を取り替えたのだが、それ以外の篇については、字句を手直ししたばかりの部分もあった。後になって向秀の解釋の別本が出現したので、現在、向秀と郭象、二つの『莊子』があるが、（兩者の）解釋は同一なのである。

この記事については歷代、長い議論がある。『四庫全書總目提要』は、現存の郭象注と向秀注の佚文とを詳しく比較している。例えば、『列子』黃帝篇の「列子問關尹曰、至人潛行不空」から始まる一章は、『莊子』達生篇の一章と同內容であり、『列子』の張湛注（東晉）には、向秀注・郭象注の兩方を多く引用しているが、兩者の比較を通じて提要は「所謂竊據向書、點定文句者、殆非無證」と結論している。現代においては、福永光司、王利器らに專論がある。[18] これらの先行研究に新たな見解をつけ加えることは難しいが、郭象注が向秀注を踏襲した面が大きいが、しかしながら、剽竊とまでは評價できないことをあらためて確認しておきたい。[19]

また前述の通り、向秀の『莊子』注解は、「（向秀）聊應崔譔所注、以備遺忘云」（『向秀別傳』）と、崔譔注本を基礎とするものであり、また東晉の永和年間にはすでに崔譔本と向秀本を合寫したものであるらしい「崔向永和中本」なる本が存在しており（莊子音義）、兩者の近さを示すものである。

その意味では、『莊子』の本文の繼承關係を考える際、崔譔本から向秀本へ、向秀本から郭象本へという、直線的な流れを假に想定することも、ある程度は有效であろう。なお、莊子音義に引かれる向秀の說は、一六八條であるという。[20]

（一）**訓詁の注**。向秀の注自體、多く殘っているわけでないので、獨自の傾向性を把握するのは困難であるが、例えば齊物論篇の「而獨不見之調調、之刁刁」[21]について、「調調、刁刁、皆動搖貌」と注している。郭象注もこれと同じであるので、こういった部分は、向注が郭注のもととなっていることが分かる。また同樣に、德充符篇の「魯有兀者叔山无趾、踵、見仲尼」につけられた、「踵、頻也」という向秀の訓詁も、郭注に採用されている。郭象の訓詁的な理解に、ある程度の影響を與えたものと考えられる。現在傳わっている郭象注の訓詁の水準が高いことを考えると、向秀注の水準も高かったことが推測されるが、資料がまったく不足しているのは殘念である。

（二）**事物の注**。向秀注にはいくらか事物に關する注があったらしい。例えば、養生主篇の「合於桑林之舞、乃中經、首之會」については莊子音義に「向、司馬云、（經首、）咸池樂章也」と見えており、また天下篇の「以巨（向本作「鉅」）子、爲聖人」について、「墨家號其道理成者爲鉅子、若儒家之碩儒」といっている。これらの語について、郭象は何も解釋を加えていない。事物の注に冷淡であった郭象と比較すれば、向秀は事物の注を避けていないことが理解される。

(三) 義理の注。 義理の注に關しては、先述の通り、多くの學者が檢討を加えており、向秀注には、郭象注の基礎となるような內容があったことは疑いない。ただ、兩者が一致しない場合も多く、郭象が底本を變更した例、說の內容を變更した例も多い。向秀自身の義理の注が傳わったものは、上述の『列子』黃帝篇の張湛注に引かれたものを除けば多くはない。

一言しておきたいのは、向秀が、以下に見る司馬彪の注釋を見ていた可能性についてである。すなわち、莊子音義には、向秀の引用として「馬氏作某」「馬氏音某」などといっている。[22] これがもし向秀自身の注である認められるならば、[23] かつこの「馬氏」が司馬彪を指すとすれば、[24] 向秀は司馬彪注本を參照していたことになり、たとえば司馬彪說と郭象說とが一致している場合、向秀を經由した可能性を考慮する必要があろう。

第三節　司馬彪の『莊子』注

司馬彪は晉の宗室に連なる人物であったが、素行に問題があり、父の高陽王、司馬睦から廢嫡され、それ以後、「由此不交人事、而專精學習、故得博覽羣籍、終其綴集之務」と、學問に專念した。[25] 生沒年は未詳であるが、『晉書』の本傳に「惠帝末年卒、時年六十餘」とあるので、二四〇年前後に生まれ、四世紀初頭に沒したらしい。

なお、莊子音義に引く司馬彪の說は、七五七條に及ぶといい、[26] 莊子音義所引の說の中では最多であり、またそれ以外の古籍にも引用されており、輯本もある。[27]

（一）**訓詁の注**。養生主篇の「緣督以爲經」について、郭注は「順中以爲常也」と解釋している。莊子音義はこの部分、「李云、緣、順也。督、中也。經、常也。郭、崔同」とする。一方、司馬彪の說は（莊子音義にはないが）、左思「魏都賦」の注に「緣、順也。督、中也。順守道中、以爲常也」と見えている。[28] こうしてみると、「督」を「中」と訓じ、「經」を「常」と訓ずるのは、崔譔にはじまり、司馬彪も郭象もそれに從っていることが理解できる。

天運篇の「仁義、先王之蘧廬也」を、司馬彪は「蘧廬、猶傳舍也」と注し、郭象も同じ解釋を施している。これは、「蘧」を「遽」の假借であり、『說文解字』の「遽、傳也」の訓と合致する、と孫詒讓はいう。[29]

（二）**事物の注**。人名・地名などの固有名詞を含む、ものや事柄の注、そして名物的な注は、一般的に言って漢魏の注釋家の重要な關心事であったが、『莊子』の注釋史に限れば、それほど重視されたとは言えない。特に、後述する通り、郭象は事物については極めて無關心であった。しかしながら司馬彪はそういう氣風の中にありながら、『續漢書』を著述し、[30] また譙周『古史考』を補訂したほどの歷史家であったので、[31]『莊子』に見える古代の事物にも强い關心を抱いていた。

事物の中でも人名・地名などの固有名詞の注がとりわけ詳細であることに特徵がある。以下の例は、田子方篇の「莊子見魯哀公」に對してつけられた司馬彪注である。

莊子與魏惠王、齊威王同時、在哀公後百二十年。

莊子が生きたのは、魏の惠王（在位、前三六九～三一九）、齊の威王（在位、前三五六～三二〇）の頃であったというのが司馬彪說であるが、それは、魯の哀公（在位、前四九四～四六八）の時代よりも百二十年後のことだという指摘である。莊子

が魯の哀公に面會したと傳える『莊子』のこの章の虛構性を言うものであろう。古代の歷史に强い關心を持ち、時間軸に敏感であった司馬彪らしい注釋といえよう。[32]

同樣に、說劍篇の「昔趙文王喜劍」に對して、司馬彪は次のように注している。

惠文王也、名何、武靈王子、後莊子三百五十年。『洞紀』云、「周赧王十七年、趙惠文王之元年」。

司馬彪の依據した『洞紀』に據るとしても、趙の惠文王が卽位したのは紀元前二九八年に當たり、[33]莊子より「三百五十年」も後の人というのはありえず、『經典釋文』がこれに續けて「一云、案『長曆』推惠文王與莊子相值、恐彪之言誤」と付け加え、司馬彪の誤謬を指摘する說を紹介したのはもっともであるが、「三百五十」の數字に傳寫の誤りがある可能性もあろう。いずれにせよ司馬彪は、莊子が趙の惠文王に會いに行ったと傳える『莊子』のこの章の史實性を疑ってこのように注釋したものである。

固有名詞ではなく、名物の注もある。齊物論篇の「狖、猵狙以爲雌」に對し、崔譔は「猵狙、一名獡牂、其雄憙與狖雌爲牝牡」といい、司馬彪は「狙、一名獡牂、似猨而狗頭、憙與雌猨交也」という。說が相當に近似しているので、司馬彪が崔譔注を參考にした可能性はあろう。

また、達生篇「桓公田於澤管仲御見鬼焉」章に見える、「漏」「髻」「倍阿」「鮭壟」などの鬼神の名稱についても、司馬彪はそれぞれ詳しい注をつけている（莊子音義）。それ以外にも、則陽篇の「犀首」について、魏の官職であることのみならず「若今虎牙將軍。公孫衍爲此官」などと說明しており、[34]制度の說明にも配慮がある。[35]また、天下篇に惠施を評して「至大無外」以下、名家の命題を列記するが、それらを詳述するのも司馬註の特徵である。

（三）義理の注。郭象の場合、内篇の各篇に篇題の注がついており、その意義についてかつて述べたことがあるが、[36]司馬彪にもその形跡があるのは注目すべきことである。すなわち、潘岳「秋興賦」（『文選』巻十三）の「逍遙乎山川之阿、放曠乎人間之世」に對する李善注に次のようにある。

『莊子』有「逍遙遊」篇、司馬彪曰、「言逍遙無爲者、能游大道也」。又有「人間世」篇、司馬彪曰、「言處人間之宜、居亂世之理、與人群者、不得離人。然人間之事、故世世異宜、唯無心而不自用者、爲能唯變所適而何足纍」。

周知の通り、『莊子』内篇はそれぞれ三字の篇名を持つが、司馬彪注は、その三字をうまく取り入れつつ篇の大意を解いており、これはこの注が義理的な解釋意圖を有することを示すものである。[37]なお、外篇の駢拇篇の篇題注の可能性がある注、[38]雜篇の外物篇の篇題注の可能性がある注の佚文がそれぞれ存在するが、[39]おそらく篇題の注ではなく正文の注であると考えられるので、これ以上は論じない。

また、謝靈運「入華子崗是麻源第三谷」（『文選』巻二十六）「且申獨往意、乘月弄潺湲」の李善注に、「淮南王莊子略要」なる文獻の一文「江海之士、山谷之人、輕天下、細萬物、而獨往者也」を引き、さらにその司馬彪の注を引用し、「獨往、任自然、不復顧世也」という。[40]この「淮南王莊子略要」の内容については未詳で、王叔岷は『莊子』の一篇ではなく『淮南外書』の逸篇であるというが、[41]少なくとも、司馬彪が書いた注釋であることは間違いない。「獨往」という道家のタームを解釋して、「任自然」と言っており、ここにも司馬彪注の「義理」的な傾向をうかがうことができる。司馬彪本の『莊子』ならびにその注解は、郭象の重要な據りどころのひとつとなったものと推測される。

第四節　郭象注の獨自性

郭象は『晉書』卷五十に立傳されているが、生沒年についてはただ「永嘉末病卒」と記すだけで、特に生年について議論がある。本稿では王曉毅の說に從い、二六〇年代の中頃に生まれ、三一一年に沒したと想定しておく。[42]

郭象の『莊子』注解の最大の特色は、本稿にいうところの「事物の注」を闕くことではあるまいか。逍遙遊篇冒頭に見える鵬や鯤について、郭象が「鵬鯤之實、吾所未詳也」とそっけなく言い放ったことは、それを端的に表現するものであり、おそらく、事物――特に固有名詞――に詳しい司馬彪注などを念頭に置き、それとの懸隔を强調したものであろうと考える。「吾」という語を含むこの部分は、おそらく向秀を繼承したものではなく、郭象みずからの言葉であると考えられ、[43]郭象玄學の原點ともなっているものと思われるのである。

また例えば前述のように、齊物論篇の「猨、猵狙以爲雌」に對して、司馬彪は「狙、一名獡牂、似猨而狗頭、憙與雌猨交也」といい、崔譔は「猵狙、一名獡牂、其雄憙與猨雌爲牝牡」といって名物の注をつけ、向秀は「猵狙以猨爲雌也」と文義を說く。しかし郭象は、このサルの仲間については何も言わず、ただ「此略舉四者、以明天下所好之不同也」と段落の大義を示すのみである。かく事物に關する注がまことに冷淡であるところに、郭象の特徵のひとつがある。

このように見ると、郭象の『莊子』注釋には、訓詁の注、義理の注の二つの側面はあるが、事物の注はほとんどないと言ってよい。その二つのうち、郭注は義理の注、すなわち玄學を傳える注としての性格が勝っており、訓詁の注は多くないと見られており、郭象注の訓詁に關する論文はほとんどないが、郭象は訓詁については先行の注を繼承しており、それのみならず、獨自の訓詁の水準を具えたものでもある。上述の通り、郭象の訓詁は、崔譔・向秀・司馬彪の訓詁をそれぞ

れ踏まえた形跡があり、特に、向秀との直接的な關係は無視できないのだが、向秀の訓詁の佚文があまりにも少ないという資料上の制約があり、それ以上は考究できないので、いま郭象注に卽して考察するものとする。以下、郭象の訓詁をいくつか擧例する。

大宗師篇の「已外生矣、而後能朝徹」に見える「朝徹」の語につき、「豁然無滯、見機而作、斯朝徹也」という釋する郭象を、兪樾は「早達（瞬時に本質に達する）」と解釋したものとみなし、「得其義」と判定している（『諸子平議』）。[44]

駢拇篇「而敝跬譽無用之言非乎」の「敝跬」は難語であるが、莊子音義に引く郭象音では、「敝」を「父結反」と讀み、「跬」を「音屑」と讀んだ。[45] 孫詒讓によれば、この讀みは崔譔・向秀・司馬彪らの說と異なり、この語を「蹩躠」（努力するさま）と讀んだものであるという。[46] これは、諸家とは異なる、郭象獨自の理解である。

また、養生主篇に「天之生是使獨也、人之貌有與也」とあり、郭象は後の句について「兩足共行曰有與」と注している。これは思いつきの說のようにも見えるが、王叔岷は『愼子』（『群書治要』所引）にも「與」と「獨」との對があることを根據として、郭象を是としている。[47]

齊物論の「是其言也、其名爲弔詭」について、郭象は「夫非常之談、故非常人之所知、故謂之弔當卓詭、而不識其懸解」と說いた。「弔詭」を「弔當卓詭」と解釋したものだが、章炳麟の說を參考にすれば、郭象の「弔當」は「俶儻（卓越非凡の意）」の通假で、「卓詭」は「倬詭（奇特の意）」の通假と考えられる。[48] 全體として郭象が言わんとするのは、「長梧子の語ったことは尋常の言葉ではないから、常人には分からず、常人はそれを非凡な言葉だと感心しはするものの、惑いを解くものだとは知らない」ということであろう。[49]

德充符篇の、王駘を褒める孔子のことば、「奚假魯國」について、郭象は文脈をくんで、「與物冥者、天下之所不能遠、奚但一國而已哉」と釋している。注目したいのは、「奚假」を郭象が「奚但」と解釋したことである。この郭注は、裴學

海『古書虛字集釋』にも正解として採用されており、「奚假」（「奚暇」）は「奚但」と同義とされている。郭象の古書讀解の精密さを示す一例であろう。なお、成玄英が「何但假藉魯之一邦耶」としたのは、どうやら郭象の意圖を取り違えたものらしく、少なくとも郭象を正確に敷衍したものではない。

以上は訓詁に關わることであるが、訓詁からはじまって大義の注にまでなっている例もある。齊物論篇の「夫大塊噫氣、其名爲風」の「大塊」とは何か。莊子音義によると、郭象以前に、司馬彪が「大朴之貌」というが、しかし他の資料によるとこの部分の司馬彪注は「大塊、謂天也」であったともいう。[50] 郭象注は次のようにいう。

大塊者、無物也。夫噫氣者、豈有物哉。氣塊然而自噫耳。物之生也、莫不塊然而自生、則塊然之體大矣、故遂以大塊爲名。

「大塊」とは「大いなる、塊然たるもの」で、それは「存在しない物」であり、萬物は「塊然」と、[51] そして「おのずから生ずる」と、そのように郭象は考える。こういった郭象の『莊子』理解について、兪樾は「失其義」と否定するが、むしろ私は、「郭象釋大塊爲無物、乃郭象之本色、此當別論、不可輕以爲失也」と評する王叔岷の見解に從いたい。郭象は、司馬彪の「大塊、謂天也」の訓を踏まえた可能性があり、[52] それをさらに進めて上記のような解釋を施したものであるかも知れない。

郭象と先行の注との關わりを知るうえで、前述した人間世篇の篇題の注について、あらためて述べておきたい。この注において、司馬彪と郭象は非常に接近している。

【司馬彪】言處人閒之宜、居亂世之理、與人群者、不得離人。然人閒之事、故世世異宜、唯無心而不自用者、爲能唯變所適而何足纍。

【郭象】與人群者、不得離人。然人閒之變、故世世異宜、唯無心而不自用者、爲能隨變所適而不荷其纍也。

これは、むろん偶然の類似ではありえず、また上述の通り、司馬彪注を引用した『文選』李善注は、逍遙遊篇篇題の注と人閒世篇篇題の注の両者を同時に引用しているので、司馬彪注と郭象注を取り違えたという可能性も高くない。おそらく、郭象が司馬彪注を取り入れたものではないかと推測する。

かつて福永光司は「郭象において莊子の萬物齊同は自得の論理的根據として把握され解釋されている」といった[53]。郭象注の全體は、この「萬物齊同」という核心によって緊密に組織されている。この意味において郭象の玄學は、獨特の思想を形成し得たものと言える。しかし本稿において確認したように、郭象注は、西晉時代に成書した崔譔注・向秀注・司馬彪注の大きくかつ多面的な影響（特に、本文・訓詁・義理の面での影響）のもとに成立したものであった。このように、郭象の獨自性ばかりでなく、先行の注からの影響が相當に大きかったことは認めなければならない。

結び

かつて聞一多は、魏晉時代における『莊子』熱について次のように說いた。

魏晉之間、莊子的聲勢忽然浩大起來、崔譔首先給他作注、跟著向秀、郭象、司馬彪、李頤都注『莊子』、像魔術式的、莊子忽然占據了全時代的身心、他們的生活、思想、文藝—整個文明的核心是『莊子』[54]。

確かに魏晉は、『莊子』が一種、特別な歡迎を受けた時代であった。ここに擧げられた諸家のうち、現存するのは郭象の注のみであるが、『經典釋文』莊子音義には、諸家の說が樣々引用されており、斷片的ながらも、郭象注の特徵を捉える重要な對比資料たり得ることは、本論に述べた通りである。

諸家からの多大な影響を受けつつ、自身の『莊子』注解を成した郭象であるが、そこに際立った特色を見いだすこともできる。ひとつは、事物に關することへの意圖的な拒否である。逍遙遊篇の「往見四子藐姑射之山」の「四子」について、司馬彪は「王倪、齧缺、被衣、許由也」と注したが[55]、一方の郭象は、「四子者、蓋寄言、以明堯之不一於堯耳」と注した[56]。固有名詞に詳しい注釋をつける司馬彪を強く意識し、郭象はあえてこのようにそっけなく解いたものと考える。

人間世篇に「瞻彼闋者、虛室生白（彼の闋たる者を瞻れば、虛室白を生ず）」という一文がある。これに對する諸家の注を竝べてみよう。

【崔譔】白者、日光所照也。

【向秀】虛其心、則純白獨著[57]。

【司馬彪】室比喩心、心能空虛、則純白獨生也。

【郭象】夫視有若無、虛室者也。虛室而純白獨生矣。

比較して見ると、「室」を「心」と見る點において向秀と司馬彪が最も近いが、「生白」を、「純白獨著」「純白獨生」などと解釋する點においては、向・司馬・郭の共通性をうかがうことができる。向秀が「虛室」を解して「虛其心」というのは、『老子』第三章の「是以聖人之治、虛其心、實其腹、弱其志、强其骨」を踏まえたものであることは閒違いなかろうが、しかし郭象は、「室」を「心」と解釋せず、「有を無であるかのごとく見ること」が「虛室」であるという。つまり、『老子』と『莊子』とを融合させる向秀流の解釋をあえて避けたものと言えよう。

以上のようにみると、『莊子』の義理的な理解において、郭象は崔譔・向秀・司馬彪の說を確かに踏まえ、積極的に活用しているものの、獨自の視座のもと、あらためて『莊子』を全面的に解釋しなおし、讀者に供したものと評價できる。西晉という時代の刻印をはっきりと押されながらも、他の注をしのぎ、陸德明をして「唯（郭）子玄所注、特會莊生之旨」（『經典釋文』序錄の語）と言わしめるほどの成功を收めた理由が、そこにあるのではなかろうか。

註

（1）それ以外にも、『經典釋文』序錄には、郭象注に續けて「李頤集解、三十卷、三十篇〔字景眞、潁川襄城人。晉丞相參軍。自號玄道子〕」という『莊子』の注を載せる。その實態を明らかにすることができないので、今回は考察しない。また、それとは別に、「孟氏注、十八卷、五十二篇〔不詳何人〕」という注も著錄し、これも魏晉の注釋である可能性もあるが、こちらも考察の範圍外とする。

（2）『經典釋文』の引用は、通志堂本を底本とし、黃焯『經典釋文彙校』（中華書局、一九八〇年）を參考とした。莊子音義の善本として天理圖書館藏の宋本が存在し、影印本（『古文尙書 莊子音義』、八木書店、一九八二年）もあるが、今回、資料とした條に限っては特に用いるべきところはなかった。

（3）訓詁・事物・義理の注という三分法は、單に分析のための手段としてここで假に設けたものであり、當時の資料の中にそういう分け方があるわけではない。また、この三分法は固定的で絕對的なものでもない。

（4）吳承仕『經典釋文序錄疏證』（中華書局、一九八四年）、一六四頁、及び興膳宏・川合康三『隋書經籍志詳攷』（汲古書院、一九九五年）、五〇三頁を參照。

（5）現在の郭象本の「雜篇」に相當する內容がすべてなかったというわけでなく、ある本の雜篇の一章が別の本では外篇に含まれたりするなど、それぞれの本により、構成が違ったということである。崔譔本・向秀本にどのような篇が含まれていたのかについては、武內義雄『老子と莊子』（岩波書店、一九三〇年）、黃華珍「『莊子音義』の諸相」（『莊子音義の研究』、汲古書院、一九九九年、一〇九～一一〇頁）、劉榮賢

「『莊子』内外雜篇材料的移易分合」（『莊子外雜篇研究』、聯經出版、二〇〇四年、五三～七三頁）などの研究がある。ただし本稿ではこの問題、および司馬彪本の篇名に關する問題を取り上げない。

（6）ただし崔譔本と郭象本では篇の數も異なり、また細かい字句も異なっていることは、莊子音義から確認できることであり（例えば、大宗師篇「夫道有情有信」章の末尾に、崔譔本は郭象本より二十二字も多く文があったという）、郭象が崔譔本をそのまま使ってわけでは決してない。

（7）黄坤堯「『經典釋文』與魏晉六朝經學」（『經學研究集刊』第五期、二〇〇八年十一月）、一六八頁。この數字には、單純な異本注記なども含まれている。以下に見える向秀・司馬彪についても同じ。また注（5）に前掲の黄氏論文に、『釋文』所引の諸家注の條文數の一覽表がある（九四～九五頁）。

（8）郭注は「寄之至理、故往來而不難也」とする。

（9）なお、この注は司馬彪も同じであることを後述する。

（10）例えば、大宗師篇の「與乎其觚而不堅也」の「觚」につき、崔譔は「棱」と訓じ、郭象は「獨」と訓じており、異なる。

（11）古典に詳しかった人物のようで、他にも『淮南子』『三蒼』などを引いている。

（12）ただし、篇題の注という形式自體が玄學的・哲理的なものであると、ここで主張するわけではない。後漢においても、趙岐『孟子章句』や高誘『淮南鴻烈解』など、篇題の注を持つ注釋がすでに登場しており、そういった學術傳統の延長線上にあるものとして、崔譔の注を位置づけることができよう。ただそれは同時に、後の郭象の玄學につながるものであった面も同時にあるということである。

（13）『莊子』ならびに郭象注の本文は、續古逸叢書本に基づく。ただし、王孝魚（郭慶藩『莊子集釋』中華書局、一九六一年、の校勘記）、及び王叔岷（『莊子校詮』中央研究院歷史語言研究所、一九八八年、ならびに『郭象莊子注校記』中央研究院歷史語言研究所、一九九三年）の說によって改めたところがある。

（14）例えば、齊物論篇の音義に「崔云、齊物七章、此連上章、而班固說在外篇」とある。また、同じ齊物論篇の音義に「崔云、或作霓、音同、際也。班固曰、天研」と見える班固說も、崔譔の注から轉引したものであろう。ただし班固注本といっても、ただちに『漢書』藝文志著錄本と結びつけるべきではなかろう。

（15）向秀の事跡については、王曉毅『郭象評傳』（南京大學出版社、二〇〇六年）の附錄に見える「向秀年譜」（三七二～三八〇頁）が最も詳しい。そこでは、かりに二二三年を向秀の生年としている。

（16）向秀注の『莊子』解釋に關しては、『世說新語』の劉注に引く『向秀本傳』『向秀別傳』『竹林七賢論』などにも見えている。

（17）『晉書』郭象傳はこの『世說新語』の一節をほぼそのまま引用している。

（18）福永光司「郭象の『莊子注』と向秀の『莊子注』―郭象盜竊說についての疑問」（『東方學報（京都）』第三六號、一九六四年。のち、『魏晉思想史研究』岩波書店、二〇〇五年、に收める）。王利器「再論『莊子』郭象序的眞僞問題」（『曉傳書齋文史論集』中文大學出版社、一九八九年、所收）、二〇九～二一六頁。

（19）この點については、拙稿「郭象による『莊子』刪定」（『東方學』第九一輯、一九九六年。のち、『中國中古の學術』、研文出版社、二〇〇六年）、二五二頁、注（六）に述べたことと、基本的に變更はない。

（20）前掲、黄坤堯「『經典釋文』與魏晉六朝經學」、一六八頁。

（21）底本は「之刁刁」に作るが、王孝魚・王叔岷により改める。

（22）人間世篇・駢拇篇・馬蹄篇・庚桑楚篇の音義に、それぞれ一條ずつ引用されている。

（23）向秀の『莊子』注解は、向秀の死後に世に出たものであるから（『世說新語』文學篇に「唯秋水、至樂二篇未竟而秀卒。秀子幼、義遂零落、

然猶有別本。……後秀義別本出」という）、第三者の手が加わっていた可能性は高いと考えられるが、向秀自身が司馬彪注本を見た可能性は無視できない。

(24) 『後漢書』馬融傳に「注『孝經』『論語』『詩』『易』『三禮』『尚書』『列女傳』『老子』『淮南子』『離騷』」とあり、馬融が道家思想に深い關心のあったことが知られ、「馬氏」が馬融の『莊子』注を指す可能性も皆無ではない。道家思想に對する馬融の關心については、池田秀三「馬融私論」（『東方學報』京都、第五二册、一九八〇年）、二六七～二六九頁を參照。

(25) 『晉書』卷八十二、司馬彪傳。

(26) 前掲、黄坤堯「『經典釋文』與魏晉六朝經學」、一六九頁。

(27) 茆泮林輯『十種古逸書』本（光緒十四年梅瑞軒刊本）がある。また、何志華・朱國藩編『唐宋類書徵引『莊子』資料彙編』（中文大學出版社、二〇〇六年）も參考になる。

(28) 左思「魏都賦」（『文選』卷六）の劉淵林注。

(29) 『札迻』（中華書局、一九八九年、一五九頁）。孫詒讓はまた、知北遊篇の「大馬之捶鉤者」の「捶」についても、司馬彪と郭象の訓詁が一致することを指摘したが、司馬・郭説には從えない、と評している（一六一頁）。郭象は「玷捶鉤之輕重、而無豪芒之差也」と言っている。「玷捶」は重さをはかる意。

(30) 『晉書』本傳に「討論衆書、綴其所聞、起于世祖、終于孝獻、編年二百、錄世十二、通綜上下、旁貫庶事、爲紀、志、傳凡八十篇、號曰『續漢書』」と見える。その『續漢書』「八志」の部分が現存しているわけだが、司馬彪自身が「放續前志、以備一家」（律曆志の論）というように、蔡邕らの著作『漢記』十意を襲用したところが大きい。池田秀三「盧植とその『禮記解詁』（上）」（『京都大學文學部紀要』第二九號、一九九〇年）に「蔡邕が『（後）漢記』撰述において第一に精力を傾注したのは制度・文化史たる「志」（意）であった」（七頁）というのとあわせて考えれば、蔡邕が司馬彪に與えた影響、そして兩者の精神の近さをうかがうことができよう。

(31) 『晉書』本傳に「彪復以（譙）周爲未盡善也、條『古史考』中凡百二十二事爲不當、多據『汲冢紀年』之義、亦行於世」と見える。

(32) 秋水篇に「孔子遊於匡、宋人圍之數匝」とあるが、司馬彪は「宋人」は「衞人」であるべきだといい、長い注を書いている（莊子音義）。『莊子』を寓言・寄言の書としてとらえず、事實に基づいて記事を正そうとする司馬彪の姿勢をうかがうことができる。

(33) これは『史記』六國年表に卽して考えても同じである。

(34) 莊子音義、および『戰國策』鮑彪注に見える。

(35) 池田秀三「盧植とその『禮記解詁』（下）」（『京都大學文學部紀要』第三〇號、一九九一年）に、盧植の『禮記解詁』について、「盧植注全體を通覽してみてまず目につくのは、文字の訓詁や語句の解釋、および事物・制度についての説明をかなりこまやかに施してあるということである」（一頁）というように、事物・制度への關心が高さにおいては、漢代の注釋家の中でも盧植に近い面が、司馬彪にはあると見ることもできよう。

(36) 前掲の拙稿「郭象による『莊子』刪定」、一三八頁。

(37) ただし、一つ問題がある。この司馬彪注は、郭象注にきわめて類似しているということである。この司馬彪と郭象の間に觀察される酷似をどのように理解するか、それによって、かなり郭象注の理解に影響が出るものと思われる。この問題については、後述する。

(38) 莊子音義に、「駢拇、謂足拇指連第二指也」以下の司馬彪注が見える。

(39) 嵇康「養生論」（『文選』卷五十三）の李善注に「『莊子』曰、外物不可必。司馬彪曰、物、事也。忠孝、內也。而外事咸不信受也」とある。

(40) 江淹「雜體詩」三十首「許徵君自序」（『文選』卷三十一）の李善注に引く「淮南王莊子略要」の司馬彪注、陶淵明「歸去來幷序」（『文選』卷四十五）の李善注に引く「淮南子要略」の司馬彪注、「齊竟陵文宣

王行狀」（『文選』卷六十）の李善注に引く「淮南王莊子略要」の司馬彪注も、それぞれほぼ同文。

（41）王叔岷『莊子校詮』（一四一三頁）に「兪正燮『癸巳存稿』一二因謂、「彪本五十二卷中有「淮南王略要」、或漢志五十二篇爲淮南王本、爲祕書讎校者」。岷謂、「莊子略要」、乃『淮南王外書』之逸篇（『淮南子』今僅存內書二十一篇、外書已亡）、以概論『莊子』者。非『莊子』五十二篇本中有此篇也。司馬彪注云云、僅可證司馬彪有「淮南王莊子略要」注、不能確定五十二篇本『莊子』有「淮南王莊子略要」、蓋由兪氏拘泥於司馬彪僅有『莊子』注、故有此臆說耳」という。また、楠山春樹にも專論「淮南王莊子略要・莊子後解考」（『道家思想と道教』、平河出版社、一九九二年、所收）があるが、「淮南王莊子略要」は魏晉の僞作であると推測するもので、ここでは從わない。なお、「淮南王莊子略要」に見える「輕天下、細萬物」の句は、陸雲（二六二～三〇三）「逸民賦」（『藝文類聚』卷三十六）に「古之逸民、輕天下、細萬物、而欲專一丘之懽、擅一壑之美」と詠まれており、當時、一定の範圍において知られていたことは確實であろう。

（42）『郭象評傳』（南京大學出版社、二〇〇六年）の附錄に見える「郭象年譜」（三八〇～三九二頁）。

（43）さらに、天下篇末尾の「昔吾未覽莊子」からはじまる長い注などは、陸德明もわざわざ長文の音義を書いて感想を述べているもので、向秀の文章ではなく、間違いなく郭象の文章であると考えられる。また、高山寺藏の鎌倉時代寫本『莊子』の天下篇末尾に見える郭象序なども、確かに郭象の文章と言いうるものである。注（十九）に擧げた拙稿は、嚴しく見ても郭象の文と考えられるものを取り上げて、郭象の玄學を論じたつもりである。

（44）郭象音は、前揭の『經典釋文』序錄に「爲音三卷」と見えるもので（『隋書』經籍志にも「『莊子音』三卷、郭象撰」と見える）、坂井健一『魏晉南北朝字音研究』（汲古書院、一九七五年）は、「魏晉南北朝の音注家としては、前期に屬し、徐邈・李軌・劉昌宗等よりかなり早い時期の字音を傳えているものと推測される」（二三頁）とするが、郭象自身が書いたか否か、定かではないので、より愼重に取り扱う必要があろう。ただ本人がつけた音ではないとしても、郭注の內容と齟齬するものはほとんどなく、郭象注をよく理解した人物がつけた音であろうと推測され、また、陸德明以前に成書していたことは疑いない。ここでは、郭注に準ずる資料として取り上げる。

（45）この部分、たまたま敦煌寫本 P3602 が存在しているが、同文である。我々が知る陸德明『經典釋文』以外に、敦煌寫本に P3602『莊子集音』、S6256『莊子音義』という二つの『莊子』に關する六朝時代の音義資料が存在する。これらがいずれも『經典釋文』の異本であるとの見方もあるが、小島祐馬「巴黎國立圖書館藏敦煌遺書所見錄」（『支那學』第五卷第四號、一九二九年）が P3602 について、東晉の徐邈の音義であると說を立てて以來、その贊否をめぐって多くの議論がなされている。王重民『敦煌古籍敍錄』「莊子釋文 伯三六〇二」（一九三八年一月二十二日）二五三～二五四頁、許建平「伯三六〇二殘卷作者考」（『文史』四〇輯、一九九四年）、張金泉・許建平『敦煌音義滙考』（杭州大學出版社、一九九六年）などの論考があるが、私は徐邈音であると結論することはひかえたい。

（46）『札迻』（一五四～一五五頁）。すなわち、馬蹄篇に「蹩躠爲仁」と見えるのと同じ。

（47）この郭象注が正しいことは疑いないが、むしろ、郭象が『愼子』をよく讀んでいたということかもしれない。人間世篇の郭注「多賢不可以多君、無賢不可以無君」も、『愼子』の引用である（王叔岷、一三九頁）。

（48）章炳麟は「弔詭」の「弔」が「俶」に通じると指摘してはいるが、郭象注については非と判斷している。『莊子解故』（『章太炎全集』第六冊、上海人民出版社、一九八六年）、一三〇頁。しかし私は、郭象も

「弔」を「俶」と讀んだものと考える。

(49) 成玄英疏は「夫舉世皆夢、此乃玄談非常之言、不顧於俗、弔當卓詭、駭異物情、自非清通、豈識深遠哉」といっているが、「弔當卓詭」を解釋していない。

(50) 慧琳『一切經音義』卷九十五に引く司馬彪注。

(51) 「塊然」とは、『荀子』君道篇に「故天子不視而見、不聽而聰、不慮而知、不動而功、塊然獨坐而天下從之如一體、如四肢之從心」と見える語で、孤獨のさまをいう。郭象がこれを踏まえた可能性もある。

(52) 齊物論篇の後文「(天籟)使其自己也」の郭注に「自己而然、則謂之天然」という解釋が見えるように、萬物がそれ自體そのようにあることを、「天」と結びつけて解釋する傾向がある。

(53) 福永光司「郭象の莊子解釋—主として「無」「無爲」「無名」について」(『哲學研究』第三七號、第二・三册、一九五四年。のちに前掲の『魏晉思想史研究』に收める)。

(54) 『古典新義・莊子』(『聞一多全集選刊』第二、古籍出版社、一九五六年)。

(55) 莊子音義。なお、前後の文を含めたより詳しい『莊子』注が、『太平御覽』卷八十に見えている。注釋者の名はないが、司馬彪のものと考える。

(56) これについては、前掲の拙稿「郭象による『莊子』刪定」、二四八頁にて述べた。

(57) 嵇康「養生論」(『文選』卷五十三)「外物以纍心不存、神氣以醇白獨著」の李善注に引く佚文。